昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十八年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二九三号）

慈光

第二十五巻　第十号

目次

お慈悲にたちかえる……近角常観……(1)
一仏乗のこころ……白井成允……(6)
白井先生の追憶……榊原徳草……(11)
白井先生に捧ぐ……西川玄苔……(16)
師を求めるこころ……信国淳……(17)
白井先生に別れまつりて……花田正夫……(20)

お慈悲にたちかえる

近角常観

○

我等は仕方のない煩悩熾盛の人間である。瞋恚の焔の燃えあがるとき、愚痴の闇に迷うたとき、煩悩の氷で閉じられたとき、如何にするともその苦を遁れることは出来ぬ、その方法はない、仕方がない、その仕方のない私を現在ありありあわれみたまう御慈悲のましますことひとつが、我等が命である、我等の光である。

○

その大悲の御親は、煩悩のわれらをとがめたまうではない。その苦悩の衆生を可愛相であるとご覧下さるのである

かかる我等を如来がご覧なさると気付いて見れば、唯おそれ入るよりほかはない。しかるに如何に恐れ入りても煩悩の氷は堅まるばかりで融けることはない。

しかるに苦悩の衆生をあわれみたまう如来の大悲大願を仰ぎみれば、如何に煩悩熾盛の我等も頭が下りて感泣するのみである。

○

つとめこごろというものは何の益にもたたない。煩悩の起りたるとき、これをおさえんとしても駄目である。そのおさえきれない奴をあわれみたまう御心こそ、我等の心の底までやわらぐるめぐみである。

至心も我等のつとむる清浄真実ではない、如来のわれらに対する清浄真実である、清浄真実ならざる奴を、見捨てたまわぬ清浄真実の如来の御心である。

○

我等の三毒をみそなわして、無貪・無瞋・無痴の御心より遂に成就されたるおひかりが清浄・歓喜・智慧光である

清浄光というは、如何に濁れる我等の心をも清らかにする光である。

如意の釈に、一には衆生の心の如しというは、この濁れる我等の心をご承知下さるのである。二には如来の御心の如しというは、その濁れる我等を救うべく、如来の思召す

通り清浄光を成就して自由自在に我等を済度下さるのである。和讃に曰く

道光明朗超絶せり[1]
清浄光仏とまうすなり
ひとたび光照かむるもの[2]
業垢をのぞき解脱[3]をう[4]

（註）聖人のおひだりがな
①みだのひかりあきらかにすぐれたりとなり
②ひかりにてらさるとなり
③あくごうぼんのうなり
④さとりをひらくとなり

業垢を除き下さるのが何より有難いことである。

○

歓喜光もまた同様である。

慈光はるかにかふらしめ
ひかりのいたるところには
法喜[1]をうとぞのべたまう
大安慰[2]を帰命せよ

（註）
①みのりをよろこぶなり
②みだのみなり、いつさいしゆじようのよろずのなげきうれえわるきことをみなうしなうてやすくやすからしむ

一読してさえ心が融けるような心持がする。我等瞋恚の心は如何にするも歓喜の心のおこるようなものではない。

しかるに春風駘蕩（たいとう）とも云うべき如来の慈悲の御心をもつて照らして下さる故に信心歓喜の花がさくのである。

○

聖人は貪愛の心よく善心をけがし、瞋憎の心よく功徳の宝財を焼くと仰せられである。如何にも火の焼くが如く、水の湿すが如くである。急走急作して頭燃を仏うが如くするも、この貪愛瞋憎の心はとてもやまぬものである。それゆえ雑毒の喜、虚仮の行である。

しかるに如来、不可思議光載永劫（ちようさいようごう）に菩薩の行を行じたまいし時、欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず欲想・瞋想・害想を起さずとある。これ清浄・歓喜・智慧の三光を成就したまえる源である。

ひとたびこの弥陀仏日の照耀に遇いぬれば、貪愛・瞋憎の雲霧はありながら、雲霧の下明らかにして闇なきが如くである。

○

如意の釈で思い出したが、聖人が求道得信について、父の如く母の如く導かれ給いし聖徳太子およびその本地、如

意輪観自在大士の如意が実に此如意である、一一意味をうがつにもおよばず自然にその意味がこの釈に合してある。

六角堂の告命（ごうめよう）にしても、行者宿報設女犯というは衆生の意の如くである。信巻に善導の御釈を引きたまうとき、この如意の釈をもつてはじめ、最後に釈迦如来は実にこれ慈悲の父母なり、種々の方便をもつて我等が無上の信心を発起せしめたまえりという文で終つている。

略文類聚鈔には、三心釈の終りに、この二文だけを引いて絡んで曰く、「明らかに知りぬ、二尊の大悲によりて一心の仏因を獲たり、まさに知るべし、斯人は希有人なり、最勝人なり」と仰せられてある。

以上、如何に如意の釈に着眼したまいしかを知るべきである。

名号を如意宝珠に譬うるも全く同様の意味である。濁水中に投じて、しかも濁りを清めて清浄ならしむるごとく、仏の本願力の一念に遇うて、空しく過ぐる者なし、能くすみやかに功徳の大宝海を満足せしむの破闇満願の徳を與えられるのである。

かく一一味いきたれば、聖人の二十八歳の末日における叡南の無動寺大乗院における如意輪観自在大士の告命に、汝の願まさに満足すれば我願また満足すべし、とあるも、自然に一には衆生の心の如く、二には菩薩の意の如くである。何分にも源が同一なる故に、流れを追うてさかのぼれば、絡局、慈悲の源泉に達するのは決してあやしむべきではない。

○

私がお慈悲に気づきたる昔を考えるに、その当時、自らへだて心をとらんとするも、疑心をなくすればよいとは承知はしても、事実へだて心がとれぬ、疑心がやまぬのである。真面目になればなるほど、気をせめるだけでとても安心が出来ぬ。心がやわらがぬ、楽にならぬ、所謂はからい心のみでもちあぐむのである。然るに最後に、この疑い心のやまぬものをへだてたまわぬ友を見出したいと思うた、これ即ち衆生の意の如くである。

これだけでは安心は出来ぬ、その衆生の意の如くしてくれぬ友も親も見つからぬからである。終にその親に気がついた。我等の心を知りて知りて知りぬいた上に、自由自在に御意のままに、その疑うものを疑いたまわぬ、そのへだて心のやまぬ奴が可愛相であると、隔てたまわぬ無碍のみ親が阿弥陀如来であると初めて気付かして下さつたときに重き荷物をおろした様に大安慰に住することが出来るのである。これが如来の光明智相の如く、かの名義の如く、実の如く、修行し相応せんと欲するのである。

○

光明は智慧の相である、即ち無碍光の徳を得たのである名義相応して破闇満願の利益を得たのである。如来はこの苦悩の衆生を救わんがために一如法界の都より現われたまう御姿ぞと仏を知ることが出来たのである。煩悩熾盛の我等を助けんがために願を立て姿を現わしたまいた親様なりと知れたのである。

これ如来は、是れ実相身なり、是れ為物身なりと知るのである。

①無明の大夜をあわれみて
法身の②光輪きわもなく
無碍光仏としめしてぞ
安養界に③影現する。

（註）①ぼんなうのわうをむめようというなり
②ひかり、めぐるなり
③あらわれたまう

いただくところは如来の大悲大願である、無碍光の照耀である。

○

この慈悲のみ親に気付くのが信仰の一念である、そして後念相続は、畢意その初一念にたちもどりて御慈悲にたちかえることである。

この立ちかえるのが自分でたちかえれるのではない。わが方にては忘れ勝ちなれど、如来様の方では常に忘れ下さらぬ、それ故お慈悲にたちかえれるのである。

煩悩に眼さえられて
摂取の光明みざれども
大悲①ものうきことなくて
つねにわが身をてらすなり

（註）①ものうきことというは、おこたりすつるこころなしとなり

我等はご恩を忘れ勝ちなるも、如来の御慈悲はしばらくも眼を放ちたまうことはない。故に如何な忘れ勝ちなる我等も、ついつい御慈悲に立ちかえらしていただくのである

これが後念相続のよろこびである、如何にもこのお慈悲にひとたび気がつけば、常にこのお慈悲にたちかえらして下さることである。

自分としては三毒の煩悩のやまぬものを見捨てたまわぬお慈悲をひとたび知らしていただいて見れば、もはや若存若亡（にやくぞんにやくぼう）の心なく、淳（あつ）く信ずる様になる。かくなれば決定心なるゆえに一心である、一心なれば余念間雑することなきゆえに念相続するのである。源をいえばお慈悲をいただく一心である。故に論主はじめに、世尊、我一心に尽十万無碍光如来に帰命すと申されたのである。この一心が聖人の特色である。

和讃にいわく
論主の一心ととけるをば
曇鸞大師のみことには
煩悩成就のわれらが
他力の信とのべたまう

天親菩薩のみことをも
鸞師ときのべたまわずば
他力広大威徳の
心行いかでかさとらまし

この煩悩成就の我等をあわれみたまう御慈悲をいただく一念が、他力広大威徳の一心である、その願力成就のご苦労がしみじみ我等にあらわれて下さるのが、後念相続の五念（礼拝・讃歎・作願・観察・廻向）である。

○

要するところ、如来廻向の本願より来るのである。如何が廻向したまえる、一切苦悩の衆生をすてずして廻向を首として大悲心を成就したまえる故に。この大悲心が源である、我等は日々この大慈大悲にたちかえらされて讃仰さしていただく外はない。南無阿弥陀仏

昭和甲辰正月偶感

白井成允

業風吹いて止まざるに
唯だ聞く
弥陀招喚の声

声は西方より来りて
身をめぐり
髄にとほる

慶ばしいかな
身は娑婆にありつつも
すでに浄土の光耀をこうむる

あはれ　あはれ
十方の同胞
同じくみ声を聞いて
皆ひとしく一処に会せん

一仏乗のこころ

白井成允

地下水のごとくに

私は京都に余り御縁がなくて昭和二十八年に広島を退きましたとき、初めて京都へまいり住まわせて頂いておりますが、それは私の心の奥に、京の街から比叡山を眺めますと、私の故郷の山の姿によく似ているのです。故郷の山を忘れ難く、なつかしい心に引きずられて京都にまいりましたが、朝夕拝んでおりますと、このお山を伝教大師がお開きになつてから平安時代鎌倉時代、我々の祖先が精神をほんとうに養つて下さつた、そういう方々がこのお山の上で修行なさつたんだということが始終思われるのです。

伝教大師は凡そ千百年程前にこのお山をお開きになりました。横川の源信僧都がそれから二百年程後れて横川の奥の院においでになつた。更に二百年程後に親鸞聖人が二十年ばかりおいでになつた。私には最もなつかしく尊く仰がれる方々なのです。それが皆、源を聖徳太子から流れておいでになる。その流れが本当は日本民族の宗教的、道徳的魂の流れの根本をなしているものであります。

現今は仏教が忘れられてしまつているような時代の姿でありますが、しかし聖徳太子以来千三百年、伝教大師以来千百年、その永い間、こういう尊い方々によつて、私共の祖先の心に浸み込まされた教が、あたかも地下水のように表面でなくして、地面の下にかげをひそめて、じめじめと流れているような姿で、今日の日本民族の魂の奥底に浸み込んでいるのだと思うのであります。その地下水として流れている流れに私共は養われている。その養いが根本にあればこそ、あの国土全体が焼かれてしまつたような、外国に占領されてしまつたような、敗戦という惨めな国の有様から、二十年の短かい間に、外側だけでも今日のように立上り得たということが出来たのだと思います。それは忘れてしまつているようでありますけれども、ほんとうは皆がそのおかげを蒙つて、こういう力が湧き出しているのだとそう思うのであります。

得難くして移り易し

さて、今日の尊いお集りに参加させて頂いて、この会場にまいりますと、「照于一隅」という伝教大師のおことばが揚げられている、これは先き程岩本先生がお話下さつた通りであります。更に床の間に「難得易移其人身、難発易忘斯善心」（得がたくして移り易きはそれ人の身なり、発し難くして忘れ易きはこれ善心なり）というお言葉が揚げられてあります。これも伝教大師のおことばと思われます。何時も頂戴いたします三帰依文の初めに「人身受け難し今已に受く」とありますね。私ども人間として生れさせて頂いております。これを何でもないように思うのですけれども、人間のいのちは受け難いいのちである。そしてここに得難くして移り易いのは人の身である。必ず死ぬべき身である。このことを私どもは考えなければいけない。私ども一人一人の身の上であるということが根本として考えられなければならないと思います。

源信僧都の『横川法語』の中に「人間に生れたることを喜ぶべし」という言葉がありますが、この一言の中に、源信僧都には無量のお心があられたのでありましょう。人間に生れたから仏法をお聞きするようになつた。人間に生れたから伝教大師、源信僧都、親鸞聖人、ああいう尊い方々の教を耳にすることが出来るようになつた。

さて、その仏法は、このお山に根本中堂即ち一乗止観院を伝教大師がお建でになつたのでありますが、一乗の止と観を修める場所である。止は心を静め禅定に入る。観は心が静まつたところに、本当の尊い真理を観ずることが出来るという言葉だそうですが、そういう止とか観とかの修行をしたことがありませんから、本当のことはわかりませんが「一乗」ということの意味だけは、私ども、おぼえておかないといけないと思うのです。これは聖徳太子が、日本民族に初めて仏教をおしえて下さつたのですが、その仏教は、仏教の中の一番尊い仏様のお心を本当にあらわしておいでになる一乗仏教を日本民族の教として遺して下さつた

一仏乗の教

一乗というのは、一つの乗りものとかいてありますが、一乗に対して、二乗、三乗、五乗とか、いろいろの乗りものが言われております。乗りものと云うのは、私共は朝夕迷い乱れてあさましい世間を造つておりますが、そんな迷いの境から清いさとりの境に行くための乗りものを云うのです。その悟りの境にも深い浅い、高い低い種々の段階がありますので、それに応じて二乗とか三乗とか種々の乗りもの、即ち教があります。教がそんなに分かれているのは私どもの性質に賢愚、善悪といろいろ分れているからです

そういう私どもの性質に応ずる方面から区分すると二

乗、三乗、五乗とかに分けられるけれども、根本の仏様の心に立つてみると、すべての衆生みな同一である、同じいのちである。『大般涅槃経』を読ませて頂くと、そういう仏のお心を「一子地」という言葉で表わしてあります。親鸞聖人が和讃の中に、この一子地という言葉を用いて、それに三界の衆生をわが一人子と思う心であると振り仮名をつけておいでになる。迷い苦しむあらゆる衆生を、わが一人子と思うのが仏様の一子地の心である。その仏様の智慧が教となつて表われてくるところに一乗という教がある。二乗とか三乗とかに分れているのは、ほんとうは皆一乗に導き入れんがために必要な方便の教なので、結局あらゆる衆生をわが一人子としていつくしみはぐくむということになりますね。

日本仏教は、聖徳太子様が一乗教ということを教えて下さつたのは、下から修行を積んで上つていくということの奥に、仏様の境界から私ども衆生の方に下つて来て、私共を仏様の境界は摂めこんでしまうという教が根本になつて流れているのです。仏様の絶対の境界から、私どもの境界を御覧になるというと、いろいろ銘々に違つた考え、風俗羽慣等、小さい自我にしがみついて、あくせくと迷い苦しんでいる。そういうことが現実の姿でありましょう。それを自分の方から出発して、この迷い乱れを脱れようとしますと、たとえば善を行うということでも、今日の問題で言えば、ベトナムの戦い、アメリカの大統領は、戦争をもつて共産主義の人々を降伏させてしまうことが、人類のため善であるという立場に立つている。共産主義の人々は、共産主義によつて世界を制伏してしまうところに、人類に本当に幸福な社会が成り立つんだと、だから、中国やソ連の民族からは、共産主義によつて、外の国々を制伏してしまう処に善を認めます。アメリカのような立場では共産主義を敵として、それを制伏してしまわねば本当の世界平和は来ないということになる。これは自分の立場を是とし、相手の立場を非とし、我は善し、汝は悪しという立場に立つて進んで行けば、人間の世界に争いが止む時がないということが、ベトナム戦争一つ見てもわかることです。

宿業の衝突

先き程拝読しました、太子様の憲法第十条のおことば、「こころのいかりを絶ち、おもてのいかりをすて、人の違うを怒らざれ。人には皆心あり、心にはおのおの執れることとあり。彼れ是（よし）みすれは即ち我れは非（あし）みし、我れ是みすれば即ち彼れは非みす」と、そういうことが今日の世界の現状でありましょう。これは個人と個人との交わりも同様で、民族と民族、国と国との対立もみんな我れ善しとすれば彼れ悪しとする。彼れ善しとすれば我れ

悪しとするというところから起つてきています。

ところが本当に考えてみると「我れ必ずしも聖なるに非ず」我れは必ず正しいのだ、彼れは必ずしも間違つているというものではない。資本主義の立場も歴史的必然から現われてき、共産主義の立場だつて又歴史的必然の立場から出てきたのです。そこには人間生活の必然として、ある社会の状態、ある歴史の状態から、そういうのが必然に現われて来なければならない事情があるのです。これを仏教のことばで業（ごう）と云いますが、我々の宿業であります。アメリカにはアメリカの宿業があり、ソ連には又その宿業がある。その各の宿業にこばまれて、我が進むところよしと、汝の進むところは悪いと、そうしている間、宿業と宿業の衝突が絶えるところはあり得ない。

それで、一乗という立場は、この第十条の終りに「我れひとり得たりといえども、衆に従い同じうしておこなう」自分がよく物の道理がわかつていると思つても、自分一人の意見を通すということでなく、従衆同挙というのは、例えば、看護婦さんが病人を看護する時には病人の心や体の状態に同情して、同じ心持になつて、一心になっておこなうということです。自分の主義主張を棄ててしまつて、戦時中には忠君愛国を振り廻し、戦い敗れてしまうと民主々義を振り廻して、その時その時の時代に迎合するというような、こういうふうにして衆に従つて同じくおこなえと言つておられるのではないのです。

皆の人の心のすがたをよく見て、観音様が、衆生の声を見抜いて、あらゆる人の所へ行つて、これを救つて下さるように、健康な人があり、病める人があり、善人があり、悪人があり、白人があり、黒人があり、いろいろの差別の人があるのですから、その如何なる人にも、その宿業によつてそうなつていることをはつきり見抜いて、その人そのの人を理解して、その人がほんとうに生きて行くことが出来るようにしてあげること、それを従衆同挙というのです。

差別宿業を超えて

仏様が一切の衆生を一子のごとくにみそなわすことは、あらゆる衆生の宿業をよく御承知になつて、共産主義でなければ社会が立つていかないような国に対しては、共産主義を援けてよいでしょう。資本主義でなければならない国には資本主義を援けてよいでしょう。本当は、資本主義の理想といつたつて、共産主義の理想といつたつて、人類の理想社会というものは、一乗に帰すると私は思うのです。

人類が全体として各々が安らぎ和らぐ、大いなる和らぎの国を組織することが出来るためには、この各の差別宿業の地盤に固く立つて、他の地盤を無視し排斥して争つているのでなくして、根本の一子地の境界、仏様の境界から下

り来つて、すべてのものを生かして下さる、その教が本当に知られて来なければいけないと思うのです。伝教大師がここに一乗止観院と仰せられた一乗の教は聖徳太子の教から流れ出てきた教です。この一乗止観の修行が展開していつて、日本民族を本当に生かしてきた教はみなこの一乗止観院の源から流れ出た教なのだということが思われます。

一仏乗の伝統

ところが国家的には今、民主々義だ主権在民だと云つていばつていますが、そんなことばはほんとうは西洋思想から来た言葉で、それに喜び躍つているのは、祖先から伝えられた一乗の貴い教を忘れて迷つている姿です。一仏乗において天皇様も私共庶民も皆同じく如来の一人子です。聖武天皇がビルシャナ仏の御前に礼拝されて、三宝の奴と仰せられたのはこれをお示し下されたのです。決して本居宣長が歎いたように単なるインドの神を拝まれたのではなく日本国が宇宙的真理の地盤の上に立つた大和の理想を照らされて栄ゆる国であることを御身をもつて顕わしたまうたのです。仏様があらゆる衆生を一子のごとくいつくしみたまう、そのお心をもつて天皇様は国民のすべてをわが子として育くみたまう、ですから一仏乗の伝統に立つとき、天皇の大御心はいつも主権在民であられたのです。民衆の福祉を念願せられるところに本来、御身を民衆のために捨てる御精神がひそかに伝わつておられたので、それが外国からの侵略に遭つた時に、いつも顕われてきたのです。天皇様は民衆を思い、その御心が民衆にしみとおつて民衆は天皇様を思う。この民衆のすなおな気持からは主権在君が自然です。私は今の憲法に謂うところの主権在民とは本は天皇様の御心から云わせられた事としてありがたく承わります。近代西洋諸国の歴史に見られるように、民衆が血を流して国王から奪い取つたものではありません。二元対立抗争は一仏乗の世界には在りません。私共の祖先を一仏乗の流れをもつて潤してくださつたこの比叡山に詣つてこれを思うことしきりです。

（親鸞聖人の聖徳太子奉讃）

○

木も草も鳥も巌も声あげて南無阿弥陀仏とほぎわたるかも

天地のきよきまことの澄み徹り南無阿弥陀仏となりたまひけり

みほとけによばれよばれてみほとけの浄きみくにに往く旅路かな

（聞法録より）

白井成允先生の追想

榊原徳草

八月二十五日午后四時頃、白井先生のお嬢さんの信子さんからの電話で先生の御往生を知つた。私はそれまでに御入院中の御病状を、少しづつではあるが快方に向つておられると知らされていたので、この突然のお報せで気もそぞろになり、心にほっかり穴があいたような寂しさだった。

近い所に先生が住居を構えて居て下さるということは、何か私にはお浄土から影現して私を護って下さる、そういう如来の深いお思召しのように感じ温められて居ったのである。そのことが今、突如として払拭され消え去り無くなってしまつて、卒然とした心持、心に穴があいてしまったようであつた。その日はもう考えごとも読書も何もかも洞然としてうつろなままで過ぎたのであつた。

先生が入院されてから御子息達が見舞われたり、又お宅の信子さんや、同じ所に家居していられる御長女の明子さんが交代で看病に付いておられた。その日は明子さんが看病の番でしたが、衰弱のための栄養補給のために牛乳を鼻孔から注入する作業をしていられたのが、にわかに嘔吐したり下痢症状となつたりして、それが返って直接の死因をもたらし、卒然として長逝されたと承っている。

先生が京都に移られたのは二十年前で、広島文理大学を停年退職されてからのことである。先生ははじめ大和の法隆寺で佐伯定胤老師に研学の道を求めて、実は法隆寺山内の小院に寓居を得たかつたのでしたが、それが叶わぬ事情とわかり、竜谷大学の講師のこともあつて、京都に住まれることに決意されたようであった。そして私の寺に約二年半住まれ、それから現在地に御住居を建てられたのである

先生と私との因縁は、御著書などは拝読して居ったが、二十余年前に、三河の八ッ橋の鈴木文熹君の御寺でお話された時、小妻が参聴したのが始まりで、その後、この浄住寺へお迎えして御法話を願ったのが最初のこの寺との御因

縁だったと思う。

ここでは方丈の奥の十二畳の間に居って頂いた。二間の床を前に左は一間の廊下を隔てて庭に面し、右は上段の間となつていて、そこに机を置いて読書に著述に専念して居られる御日常であった。

あの先生の謹厳で所謂外柔内剛の御性格は、吾々のような野人丸出しの人間とは正に対蹠発（たいしやてき）なお方で、とても近寄り難いお人柄であるが、或る時、お風呂が湧いたのでお告げしたとき、奥から私達の居間を通って風呂場に行かれる時に、何か小さな新聞紙包みを持って私達の前に立たれたまま、しばしためらわれて心を動揺され、その包みを出そうか否かと惑って居られたのを私はフト感じたことがあった。そして、ハハア、先生も惑いがあるんだなと思った。そしてその惑いという先生の底辺があることを知って始めて私達と同じ足場を持って居られ、同じ煩悩の大地に立つ先生を感受することができ、今までのおよそ私とは次元の違う高い立場のお方のみでない、同じ煩悩の凡夫の内に居られる先生として親しみを持つことができるようになった。それからは、私は私なりに何でも先生とお話を申し、そこからお念仏のお話も伺うことが出来るようになった。

先生を御講演や御法話の場のみで仰ぐ人々とは違った、足下から頭上までの先生、そんな先生と交わらして頂いて二十年の歳月は、こうした或る一つの情景を境にして「私の先生」としての白井成允師が顕現したのである。

今の御住居を決定するときは確か御三男の成雄さんと一度土地を見に行かれたように記憶する。あそこは今こそ十幾戸の立派な住宅地だが先生が家を建てられる時は、この寺の開基壇家の葉室家の墓所一畝程の隣りで、前には、今の住宅地となった所に「殻塚」という、前方後円の古墳があり、横には寺の墓地が少しへだててある、といつたまことに閑静な淋しい離れ小島のような土地であった。そこに百三十坪程の土地に住居を造られ、成雄さんを大学に入れるために色々と御苦労せられたようであった。地鎮祭をするようにと大工さんから云われて、私はそこで讃仏偈を誦した。又井戸を堀るために今は亡くなられた大石さんに水脈を見て貰い、棟上げの時は棟梁たちが木遣り唄をうたつてこの寺の奥庭まで帰って来て、祝酒と折詰でお祝いしたのであった。私は時々検分的に見に行き、縁の下の方に悪い材木を使用しないように目を光らしたことも懐しい思ひ出となった。

約二年半もの間、奥の間に居られた先生は、冬の寒い時など火鉢に充分炭火をついで少しでも温くと心がける私達だったが何かの時におそばへ行くと、炭火はすっかり埋め

られて僅かに炭火が見える程にして、読書や執筆しておられた。我々のように火鉢を抱き込んで寒さをしのぐような姿は全然なかった。厳しい先生の生活態度がそこに見られた。又その頃先生は冷水磨擦をしておられたが、冷水磨擦と云つても普通のそれとは違い、小さい金盥に手拭を四ツ折りにして、水をたっぷり含ませたもので身体に水を塗るようになされるのである。それは健康のためというよりも自己に克（か）つ行であったように見えた、禅の僧堂の修行にも似たものであった。

現在のお住居に移られてからは私は時々お訪ねするのを楽しみにしており、お訪ねしないでも彼処に居られることで心の豊かさを覚えるのであった。その近くに井上善右ェ門氏が土地を買われたときは、いつかは井上さんもこの地に住まれるとなれば、又誰かも念仏者が居を定めはしないか、そうなれば、鷲ケ峯の光悦村のような、あの時代の文化村のような、ここには念仏者村ができはしないか、そうなってほしい、などと空想を走らすのであった。今はその城壁が崩れ去ったような寂しさである。

先生から書物をよく頂いたものである。御著者は大抵頂戴した、最近のものでは正信偈私解である。卍蔵経の華厳経を一帙下さつたり、島地大等師の著書、菅瀬芳英師語録なども頂いた。私はそれまでは近角常観師のものと池山先生の御著より外には拝読したものは無かったのだが、先生によつて島地先生の念仏に遭うことができたのである。そのようなことで解ってきたことは、白井先生は私の念仏をあちらからも、こちらからも培養して豊かになれかしと愛育して下さつたお慈悲が身にしみる。静かで冷厳ともみえる先生の衷心から流れる温情である。そんな感懐を今再び改めて追感することである。

先生は散歩によく寺へやって来られた。運動のためであるが池山先生の名号碑に必ず参拝される。その度々の散歩の或る日だったが、名号碑の裏側に刻まれている「一心正念直来、オネガヒダカラスグキテオクレヨ」を深く感じられて、寺の座敷に通られて、この池山先生の御左訓ともいうべき意訳に深い感銘を覚えたと静かではあるが輝くような眠差しで語られたことがあった。ことに「一心正念」を「オネガヒダカラ」と訓ぜられたことに胸を射られた御様子であった。それで私は、曽て顕道会館での池山先生のこのお話の時の状景を思い出してお話したことであった。

その時の池山先生の御講話は「直来」これは「スグキテオクレヨ」と言われて黒板にフリ仮名をつけられ、次に「一心正念」とは、深く如来の大御心を拝察すれば、と云われ

て、黒板に「オネガヒダカラ」とフリ仮名をつけられて聴衆の方にくるりと向き代えられ、演壇に両手をつかれ、お辞儀を我々に深々とされながら、「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」と頭を下げられた。その時のお姿は我々からは如来様そのもののように拝され、期せずして満堂の聴衆に合掌と静かな称名が湧き起り堂内に満ちた、そして涙にくれた頭はおのずから下がるのであった。

私はそんな情景をお話申上げたが、それ以来先生は念仏者の来訪があると、この名号碑に参拝しては、裏に廻られて、この「一心正念直来」を熱心に説き明かして居られた。私はそんな時御一緒するときもあったが、フト境内に出ていると先生が信友を連れて碑の裏に長らく立ち話して居られる御姿を垣間見ることが度々であったことを憶い出す。

先生は又、時々私のような者にも相談に来られることがあった。先生が来られると先ず御内仏に、そしてその左側の池山先生と近角先生の御写真に必ず合掌称名されて、それから御挨拶であった。自然私も先生と同じように両尊前に合掌念仏して、それから先生に相い対することになるのである。

先生は電話で御相談したいことがあるから伺う、と仰言って来られ、今のように御礼を遂げて対談してからでも、仲々問題に這入られないで静かに黙って居られる。こちらは胸の中がイライラして来る、そういうことが常であった

最後の御相談は、嵯峨に住まれる、京城大学時代の友人の金子光介先生からの相談に対して決断を得て、明日答えに行かれるというその話であった。八十五歳の御老体で金子氏の愚痴問題にこたえに行かれる姿を思うと胸せまるものがあった。

話は毎年の正月のことであるが、私達夫婦は元日朝の御祝いが済むと寺の墓に参り、それから白井先生を訪ねし、新年の御挨拶を申上げるのを例年の行事としていた。すると先生は二日の廻礼日に必ず寺へ新年の挨拶においでになるのである。去年であったか、先生は名号碑の裏で倒れられたことで大騒ぎになり、救急車を呼んだりした。明子さんやお孫の洋君等が走って来て電話したりした。そんなことがあつたので、今年は先生に、二日においで下さらなくても、又春になってからで結構です、御無理せられませぬように今年の答礼はおやめ下さいとおたのみしたので、今年はお祝酒を差上げることはなくして終ったのであるが、今になるとこれが何か心残りでならない。

私の寺では五月頃になると時折り子規が鳴く。明け方、床の中で聞くこともある。今年は参道の中段あたりで私は

聞いた。「ほととぎす鳴きつる方を眺むれば、ただ有明の月ぞ残れる」の歌で、故甲斐和里子先生は「鳴きつる」といって「鳴きける」と言わないのは、あの子規の鋭い強い鳴き声をあらわしている、と語られたことがある。

白井先生が寺に止宿していられたとき、上の山の共同墓地のあたりを散歩に行かれたのか、その時の御詠草を色紙に書いて下さった。

あまぎらふ　丘の墓原いざよへば
　　啼きてかけゆく　子規かも

これがその時のお歌でこの寺に残して下さつたたった一つのものとしてある。

先生の初七日忌はもう済んだ。この木曜日は二七日忌である。三七日忌には中井玄英師、佐々木徹心師と私と三人でお勤めすることになつている。私が一番近いので毎七日忌に誦経させて頂くことになった。先生との深い遙かな御法縁は今こうして私に結ばれ続けている。九月五日稿す。

白井成允（しげのぶ）先生略歴

明治二十一年二月生
仝　三十五年三月、岩手師範附属小学校卒業
仝　四十年三月、岩手県立盛岡中学卒業
仝　四十三年七月、仙台第二高等学校卒業
大正二年七月、東大文学部哲学科（倫理学専攻）卒業
仝　八年三月、愛知医学専門学校教授
仝　十年十二月、仙台第二高等学校教授
昭和二年四月、京城大学教授
仝　四、五年、ドイツ留学
仝　十五年四月、広島文理大学教授
仝　二十八年三月、広島大学定年退官
　　爾後、竜谷大学講師、武庫川女子大学教授
　広島大学名誉教授、文学博士
著訳書　カント道徳哲学（訳）信仰とその反省、道を聞く魂、歎異抄領解、人格の完成、十七憲法講讃、聞法録
正信偈領解、三経義疏の倫理学的研究、親鸞聖人の聖徳太子奉讃、等。
仝　四十八年八月二十五日、往生。

白井先生に捧ぐ

西川玄苔

参禅学道と日常生活の不一致に
悩み続けていた頃
私は京洛、葉室山の聞光庵に
先生をしばしばお訪ね申し
本願念仏のいわれを、お聞きしました

あらゆる縁に触れて
迷いさすろう私
仏法三味の中に
天地一枚にならんとする私

かかる者を憐れとおぼしめし
御本願成就
　ナムアミダブツとたのませたまい
　つきそいたまうとのお言葉を
お聞き申し

積年の暗室、一時に開け
この極悪、極愚、極狂の私が
大安心の海底の上に
坐禅し念仏し生活することが
なんなく出来るように
お導き下さいました

今日、先生のおん姿にまみゆることは
もう出来ませねど
先生はナムアミダブツそのものとなり給いて
お光はいよいよ私に近く親しく
離れず摂取しお導き下さいます

その思徳広大にて謝し難く
ただ仰ぎまいらすばかり
念仏せしめらるるばかり

師を求めるこころ

信国　淳

問　ある本に「私の信仰というものは絶対に存在しない」と書いてあったのですが、よく理解出来ません。私はよき人のアドバイスを得ることによつて自分の信仰が成り立つと思つているのですが……。

院長　よき人のアドバイスによつて、とあなたは云われるのだが、それが実はともすると、だれかの言葉によつて自分の信仰を自分流儀に組み立てることだけに終ってしまうんだね。そういうあなたの、自己流儀な観念的な信仰ではあなたを本当に支える力にはならんということなんでしょう。つまりどんな偉い人が云われることでも、それをいわゆるそのまま信ずるという形で自分の信仰を固めた場合、それわいくら固めてみても本当に人間を支える力になるものではないということです。何しろそれは他に依存する隷属的な信仰であって、他に対する自己という、ありきたりの人間関係の上に成り立つているものでしょう。自分の判断にもとづいて誰かを立派な信仰者だと決めてかかるわけだわね。

決められた人は勿論自分の外にいるわけだろう。自分はその人を人格者だと、一宗教的な人格者だと信じている。信じている限りでは、一応その人の云うことを真受けするけれども、いつたんその人のやはり人間臭い色々な面が目につき出すと、もう信仰がぐらついて、崩れはじめるということになる。大体その人に対する信頼というものが、初めから、信じたのは自分の都合で信じたんだから、今度は疑うということも。自分の都合次第で簡単に疑えるという信頼関係でしかないのだ。

だから私達のありきたりの人間関係の上に立つた信仰なんていうものは、結局私達を支える力には決してならないものなんです。それは私達の自己肯定がとるところの、一つの特殊なかたちであるに過ぎない。私共の信仰は、そういう自我そのものがひつくりかえらされるような信仰でなくてはならない。そしてそういう信仰は、ただ仏と私ども

との関わり合いの中からだけ生れるものなのです。

しかもその仏というのは、単に我々の外にあるというものではない。がそれなら私たちの心のうちにいられるかというと、心のどこを探しても仏はおられん。外にもおられず、内にもおられん。しかも私達に最も深く、最も親身に関つて来ていられるのが仏である。というのはつまり我々の観念ではとらえられぬものとして、仏は常に我々に関わつてきていられるということである。それを超越的な関わりあいという。我々は仏の超越的な関わりあいの中にこそ明け暮れ生活しているのです。蓮如上人は、目に触れるものみな悉く、これ「仏法領のもの」であると云つていられる。仏様の世界に属するものだと云つていられる。

そういう仏からの関わりあいに、われわれをして積極的に、自覚的に目覚めさせ、参加させるものとして、いわゆるよき人のことばというものが、仏の方からわれわれに与えられることになるのです。それは仏が人間のことばを媒介して関わろうとして、仏との関わり合いの中で生きようとする人間を、言葉によつて目覚めさせ、言葉によつて生み出そうとするものだからなんでしょう。

だから先生と自分との関係は、ありきたりの人間関係なんだけれども、そのありきたりの人間関係を真に出会いとして成り立たせるのは、その人間関係が実にそのまま、仏と私との出会いとして成り立つということがそこにあるからなんでしょう。そういう仏を抜きにした人間関係だけであるなら、それは善知識だのみというものであり、つまり誰かのファンだというだけである。ファンなら誰かが自分の気に入つているという、ただそれだけのものなんでしょう。あの先生はいい先生だと云つてみても、その判定は自分が自分自身の感情や意見に聞いて下すわけだし、結局は自我肯定の偏見であるにすぎない。そういう単なる人間関係から、本当の信仰が生まれるということはない。そしてそれが本当の信仰でない以上、そこでは自分が先生と、一つに出会っているのやらいないのやら、一向にどうもはつきりしない、出会つている、—先生と同じ信仰をもつてると主張する、そのことがもう独断的であり、ゆきちがいになつているのです。

そうしたゆきちがいばかりを繰返す人間そのものを内から支え、いかなるものとの間においても真の出会いを果し遂げさせないではおかぬ者、—実にそういう者をこそ生み出そうとして、仏はその本願をもつて超越的に、私ども人間に常に関わつてきていられるのです。仏との直接的な関わり合いを抜きにしたら、私達の人間関係は、たとえ師弟の関係といつてもまことにはかないものなのです。それは「つくべき縁あればともない、はなるべき縁あればはなる

る」といわれるような、実にはかないものなんです。

△浄土―親鸞と法然の出会い▽

しかし、法然と親鸞の出会いは、決してそういうものではなかった。そしてそれは、それがまさに仏からの関わり合いの中でこそはじめて実現出来た出会いであったからなんです。両聖人の出会いは、親鸞が親鸞自身から脱却し、法然が法然自身から脱却して、両者が両者共に自己自身を超越しながら、倶に一処に会するという、いわゆる同一の信心、―同一に仏の本願に帰命する信心、―同一念仏の信心における出会いであった。

だから又、その本願に帰命して、同一に念仏する信心はそこでただ親鸞が師法然との出会いを全うさせるだけのものであったのでない。それは実に、衆生のための仏の本願というものから直接関わられた信心として、同時にまた親鸞があらゆる衆生との出会いをそれによつて全うでき、又全うせねばならぬ信心でもあつたのです。親鸞において師弟一如として成立つた信心は、同時に自他一切の衆生をつつむべき信心であつたんでしょう。あらゆる衆生と平等に出会い、あらゆる衆生を平等に迎え容れなければならぬ信心であったのです。

だからこそそれは「広大無碍の一心」といわれることにもなるのです。どんなものをも障りにせぬという、いかなるものとも一つに融け合ってゆけるという、だから一切の衆生をえらぶことなく、それと一つに手をつなぎあってゆけるという、それはそんな信心なのでしょう。そしてそんな信心のうるわしく花開く世界をこそ指して、それを浄土と呼ぶのでしょう。

こうして両聖人が出会われたその出会いは、親鸞聖人からすれば単なる法然上人との出会いであったのでなく、その出会いが実にそのまま「弥陀の本願」との出会いであつたし、又弥陀の本願との出会いが実にそのまま、一切衆生との出会いでもあったということでしょう。

だから親鸞聖人にとってその師法然との出会いは、全くもつてすばらしい意味をもつ出来事だったのに違いないのです。

曠劫多生の間にも出離の強縁しらざりき
本師源空いまさずば　このたびむなしくすぎなまし

と聖人は和讃されているのですが、聖人のその出会いは我々人間として生きることの意義と無意義とを一挙にして決定する意味をもつた出会いでした。つまり我々人間として生きることの全体の意義がそれにすべてかかっているという、それはそんな大変な意味を荷った出会いであったに違いないと思うのです。

白井先生に別れまつりて

花田正夫

去る八月二十五日、京都の榊原さんから電話で白井先生の御逝去を知らされました。その刹那、四月二日浄住寺で桜花の咲きそめた庭を御子様方と散歩していられた時のお姿やら、昨年三月名古屋市教育会館での二時間余りの御講話の時など、種々な先生の面影が次から次へと去来し黙滅し続けました。

私が先生に直々お導きを頂きはじめたのは、終戦後で広島文理大学の教授をしていられた頃でした。当市の佐々木鶴二様と岸本鎌一様に御紹介して頂いて、戦災で焼野が原になっていた名古屋ですが、幸に西本願寺別院の幼稚園の講堂が残っていましたので、衣食住を求めて右往左往して心の支えを失った日暮しの中に、聞法の会を催させていただきました。

その日、先生をお迎えに佐々木、大橋、岸本様方と名古屋駅に参りました。駅に着かれた時、佐々木様が御自分の襟巻をとってお寒いからと先生に渡し、先生が電報を打ちたいと仰言ると、早速電報用紙を持って大橋様が駅内の郵便局に走られるなど、その光景が、親思いの子が父を迎えて嬉々としてつかえている姿そのままでした。

私はそうした師弟の睦びを見て、世間一切のことは遠ざかれば疎んじ、離れると忘れて行くのに、そうした障りをこえて、信水が地下水のように常に交流する事実に触れ、時と処に障えられぬ信の不滅の尊さを知らされました。

その時、四聖諦を念仏の上から信味されたお講話でしたが、特に先生の講話の速記をお願いしました小笠原さんが「私は先生のお念仏をお聞きして、今までに聞いたことのない法味を知らされました。生涯忘れられない感動です。寺院生れでもあり竜大で真宗学を教えられましたのに、今までにあんな感動をうけたことはありません」と二十余年すぎた今もくりかえして語られます。

又、その会に来て下さった、広島文理大卒業の人で愛知

県で教育課にいたOさんが、先生に早速おたずねして

「敗戦で今までの教育方針は崩れ、どう進んでよいのか全く渾屯としています、本省でも迷っている状態で現場の教師は途方にくれております。むしろ電車の車掌になった方がましだと云って辞表を出す人もありますが、どう答えてよいのか私にもわかりません。日本はどうなるのでしょうか」と。先生はしばらく念仏していられましたが、

「米国はフイリッピンと同じように日本に自分達のよいと思うものを押しつけて来るでしょうが、フイリッピンと同じようにはなりません。日本には幸に聖徳太子と親鸞聖人による教が生きておりますから、日本がどんな悲境におちてもその中から立ち上る力を持っております」

と確信をもってのお返事でした。

○

さて私自身、もう先生のお声を聞き得なくなりました今先生からお聞きして心の底に刻まれておりますことを思出のままに誌しましょう。

先生は岩手県に生れられましたが、十一歳の時お母堂が三十五才で亡くなられたのであります。それにつけ「幼い時身体が弱かつたので母に苦労をかけ、それで生命を縮めたように思われそれがいつも苦になりました。父が儒教をよるべとしていましたので、孔子の教をひもときますと、〃天なり命なり〃といわれる。併し、母の死を天なり命なりですますことも出来ず、天とは一体何なのか、命とは何かと考えましたが、結局分りませんでした」

次いでキリスト教に心ひかれ、海老名弾正氏の導きを受けられたのですが、段々求められるうちに疑問がおこったのであります。

「神は愛であるのに、信ずる者は天国に、信じない者は煉獄におとすということがうべなえません。矢張りよい者は救い悪い者は捨てるという二元対立から出ていないことが知らされました。

次に、それでも努力して行けば信じうるかもしれないがそれによつて自分は天国に生れ得ても、亡き母は信ずることは出来ないから煉獄の苦が続き、自分はそれをどうすることも出来ない。それでは子として天国でひとりで楽しむことは空しいとなりました」

このようにして、人格の完成と理想の実現を唯一の願いとせられた先生が、孔子やキリストにその理想像を描き、その様になりたいと志されたけれど途中で懐疑の雲に覆われて、天も神も失い、理想は砕けて、生れたから生きるだけという状態におちられたのであります。

そうした時、思想的流浪生活の中からも、東大の倫理学を希望して入学せられたのでした。そこでカントやプラトンを学び、人間の理想界はあるけれども自分の不真面目のためにそれが得られぬと分つたと云っておられます。

とも角も光の影さえも射さない生活に耐えかねて、当時二高の倫理学の教授をしていられた三好愛吉先生を訪われて苦衷を訴えられたのであります。すると三好先生は、

「それでは仏教を聞きなさい。そのうちでも浄土真宗が君に適していると思う。東大の赤門近くで近角常観師が毎日曜講話をしていられるからそこで聞きなさい。但し近角師は自分の体験をもととして、それを同じ三、四のたとえで話されるから四五回聞くと大体はわかってくるが、それでよいというものではない。一つことを何返も何返も繰り返して下さる方こそ本当に道を獲た人なのだ。その話が何時もあたらしく聞けるまで聞き抜きなさい」

と勧められ、紹介状を頂いて、近角先生をたずね「何を読んだらよろしいでしょうか」とおたずねになると、「歎異抄」と答えられた。そこで早速拝読されると、四章に「念仏していそぎ仏になりて思うが如く衆生を利益する……」とあり、五章には「いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだいずれの業苦に沈めりともまず有縁を度すべきなり」とあり、ここに亡き御母堂をも自分が浄土に生れ成仏出来た暁には救い遂げることが出来る、そのためには先ず往生浄土の因である信心を獲なければならぬとなられたのです。

こうして数年聞法せられたけれど信心が得られない、これは自分が不真面目であるからと身を責め、歎きを繰返されるばかりでした。とうとう或夏期求道会の座談会の席でたまらなくなって近角先生に苦衷を訴えられました。すると

「君は久しく聞いているのにまだそんなことを云っているのか。真面目になったら信心か得られると思っているけれど、そんなことを私が何時話したことがあるか。

自分の真面目で仏様を摑もうとでもしているのか。自分の真面目で摑み得るような信心ならば、それはまた自分の心と一緒にどうにでも移り変るものだろう。そんなつまらない信心など得て何になるか、

仏様は君に真面目になれなどと云われはしないではないか、むしろ反対に仏様は〃君がいくら真面目になろうと思っても駄目なのだ、その真面目になれないのが君の本性なのだ、その本性がいかにも可哀そうでたまらない〃と、その真面目になり得ない処に飽くまでも同情し、見捨てないと呼んで下さるのだ。仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられ、罪悪深重煩悩熾盛の凡夫を救おうと願うて下

さるのだ。君はこの仏の本願を聞かずに、自分の思いで全く逆の方に向いているのだ……」

およそこの様なことをお聞きして、今まで自分の思っていたことが全く逆であった、不真面目な自分の本性に眼をさまして頂き、こんな者が真面目になろうなどとすることが身の程も知らぬ驕慢なことを知らされ、かかる不真面目な者だから飽くまでも救うと呼ばれる無限のお慈悲こそ南無阿弥陀仏のおんこころと聞かされましたと、聞法のかなめを繰り返しお聞かせ下さいました。それに加えて、

「私は極めて鈍感の性で、この極めて重大な事が何時のことであったかおぼえて居りませず、又その時直に信心歓喜と強い感激に入ったのでもありませんが、ただ確かなことは、その時まであせり求めてきた心の煩悶が、その時から解かれました。そして不真面目が気にかからなくなり、不真面目な自分の姿が現われるとすぐお念仏が現われてくださる。このどうしようもない浅間しい私の苦悩を飽くまでしろしめして憐んで下さるお慈悲が南無阿弥陀仏と現れて下さる。これは今日の私にとって、年々あさましい罪業を重ねて、齢と共に悪道に迷うこと深くなつてきた私には限りなく有難いことで、謝しても謝し尽くせない鴻恩であります」

と述懐されました。

其後近角先生が何時も引用された跛の娘の話をして、「如来のやる瀬ないお慈悲に腹ふくれる」信心の譬として島地大等先生のお宅の土曜会で白井先生が語られると、それから数日後に島地先生から前田慧雲師をお訪ねして教をうけるようにと勧められたのであります。

前田和上は「浄土真宗は、本願を聞く者を必ず浄土に往生せしめて下さる。それは如来の本願から発起せられ成就せられる。煩悩熾盛の私共をこの苦悩の境から救うて如来の浄土に往生せしめようためである。この根本の御願を聞かないでは一時の感激に終り易く、真実に生死を超えしめる永遠の信ではあり得ないであろう。聖人の教えられる南無阿弥陀仏は三世に流転する私共を救うて浄土の無漏のさとりに入らしめようとの本願から成就せられた徳号であらせられる。念仏申すにつけてもこの如来の恩徳によって三世流転の生死を離れ、浄土のさとりを得しめて下さる幸慶を感謝しつつ日々の務めを尽くさせて頂くのが大切である

というようなことを懇切に教えられた由であります。そこで、跛の娘を捨てぬ親は現実では跛をどうすることも出来ぬが、仏の大悲は浄土に迎え入れて片輪でない、立派なさとりの身にして下さるまでたすけ遂げて頂けるということを知らされたのであります。

それで、歎異抄にひきつけられた浄土の慈悲という言葉を単なるあこがれでなく、弥陀仏の本願力から恵まれる事実としてありがたく信味せられはじめた、と仰言づていました。

其の後大正八年に名古屋の愛知医専に招かれ大正十年に母校の仙台の第二高校の教授になられたのでありますが、その頃仙台で針生さんと云う篤実な方がおられ真面目に道を求めながら、易往而無人（往き易くして人無し）の聖語を己れに当てて省み、自分は無の方に入る者ではないかと歎かれていたが、たまたま直腸ガンの手術を受け、余命いくばくもなしとさとづて後、終に他力廻向の信に徹して易往の念仏を喜ばれる様になられました。針生さんは平素から近角先生を慕づておられたので、仙台の求道会に近角先生が来られた時に最後の御法話を請われたのであります。

白井先生は近角先生のお伴をされて病床で耳を傾けて聞かれると、近角先生の御法話は終始如来の浄土を告げられ「浄土の荘厳は法蔵菩薩の願力によって成就されたもので、私共の罪濁に苦悩するのをみそなわして、哀れみ救わずにはおかじと同悲したまう御誓こそ遂に浄土を建立し荘厳せられたのである。……そこに私共の罪浊を清め、無漏清浄の身にならしめんと、私共を招き呼びたまう、そのやるせないお慈悲をよくよく聞きまづる時、罪深ければこそ、悪重けければこそ、いよいよ往生の望みは確かなのである云々」と切々とお話しになづたのを聞きとられ深い感銘をうけられたのであります。

これによって、近角先生が平常安りに浄土を説かれないのは私共が先後を顚倒して、真実にお慈悲を頂かず、浄土のたのしみを願うようなことがないようにとの御配慮からであったと大いにうなづかれたのであります。

以上のことは先生の信のあゆみの中心核で、名古屋に来られてのお講話には必ずここを繰り返して仰言ったので、私は一番深く感銘をうけておるのであります。

（昭和四十九年九月誌す）

御紹介

親鸞聖人の聖徳太子奉讃　白井成允述

定価、五〇〇円　送料八〇円

発売所　京都市下京区堀川通花屋町、百華苑

振替　京都　二五七八八番

発行所　大阪市天王寺区下寺町三の六番地、聖徳太子会

あとがき

京都一道会御案内

時、　十月二十八日（日曜）午后一時
所、　京都市右京区山田開町、浄住寺
道筋、京都駅より苔寺行きバス、終点下車。
　　新京阪、桂駅乗りかえ、上桂下車。

毎年一道会には御出席下さいました白井先生が亡くなられ淋しいかぎりであります。私は訃報をうけました日から先生に御揮毫頂いた十字名号と、さにはべの紅葉の萩の下蔭に小鳥遊べり南無阿弥陀仏の短冊を掲げ、今迄に御恵与いただいた御著書を机上にならべ、心あたらしく拝読申しております。

一期一会、常無迅速とはかねがね知らされながらも、常楽我浄の四顛倒の妄見におちて、突きあたっては驚くことしか出来ませぬ身とて、御生存中は、何時でも会える、何度でも読めるという心の油断から、読むにも聞くにも軽く浅薄なことの繰返しに終りましたことは慚愧にに堪えません。

会者常離かねてありとは知りながら
　昨日今日とは思はざりしに

との祖聖の恩師の訃を聞かれた時の歌を懐しく誦しております。

「一仏乗のこころ」は、先生没後二日目に製本されました「親鸞聖人の聖徳太子奉讃」の中から転載させて頂きました。このこころこそ対立抗争と妥協的平和の二元対立を超えた真実の和らぎの道の開ける根源であります。

榊原徳草様の先生の追想文は、先生の日常生活、所謂よそゆき姿でないものを知らせて頂きました。榊原さんは東本願寺の末寺に生れられながら、縁あって黄檗禅の寺に住まれながら、親鸞聖人に心の光りを得られた方であります。

「白井先生に捧ぐ」の一文は、曹洞禅に深い御縁を持たれた西川玄苔様の述懐は、ありがたい御領解であります。私は何時も良寛さまが道元禅師の跡をたどられながら、念仏を深くお味いになったことになぞらえて思い併せております。

○

先日、ロダンの言葉に「人のなし得る最大なものは讃歎である」とあるのを見出し、同時にニイチェは「人の経験し得る最も大なるものは見下げはてである」と『超人』の中で言っているのを思い併せ、そうした二つの相反する命題を超えて、一つにとかすものこそ、機法二種の深信、たすかるべからざる者のおたすけの無碍道にあると気づき、善導大師の信徳を仰ぎました。

＜御案内＞

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半。南区駅上町二ノ八八。一道会例会。市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル二軒目。

○毎月二十四日、午前、午後。昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）
編集・発行人　花田正夫
　　電話八二一局七〇三七番
　　名古屋市南区駅上町二ノ八八
印刷人　吉野穂志郎
　　愛知県西加茂郡三好町大字福谷
発行所　慈光社
　　名古屋市南区駅上町二ノ八八
　　振替口座　名古屋一〇四七〇番
　　郵便番号四五七